

## 九州沖縄農業研究センターニュースNo.3

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24514/00007804">https://doi.org/10.24514/00007804</a>



# 九州沖縄農業研究センター ニュース

No.3

2002年3月



促成栽培用品種として開発された  
“さちのか”の着果状況



系統選抜試験の栽培



生産力検定試験の栽培

九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部（福岡県久留米市）では、新しいイチゴ品種の開発を進めています。  
(写真提供：沖村 誠)

## ● 主な記事 ●

- 巻頭言 九州沖縄農研野菜花き研究部の自己紹介
- 研究成果の紹介
  - 水稲直播栽培に用いる種子の保管と予措
  - オオムギ萎縮病抵抗性に関する量的形質遺伝子座近傍 RFLP マーカー
- 九州沖縄農研の動き
  - 琉球弧のさとうきび—地域ぐるみ歴史ぐるみの

- 禰渡し☆人事院総裁賞受賞記☆
- イチゴ市販開始！ 地域総合研究成果
- 九州沖縄農業試験研究推進会議本会議の開催
- 海外見聞 タイ東北部見聞記
- 研修雑感 依頼研究員の感想
- 九州沖縄農研シンボルマークの決定
- 人のうごき



## 九州沖縄農研野菜花き研究部の自己紹介

野菜花き研究部長 岩永 喜裕

### 1. 九州沖縄農研野菜花き研究部の発足

公道に面した正門入り口に「独立行政法人農業技術研究機構九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部」の看板を出してから早1年が経過しようとしている。時々タクシーに乗り、九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部へと告げると、運転手氏には通ぜず、野菜・茶業試験場や野菜試験場、もっと古い園芸試験場の名を出して了解となる。かつては九州農業試験場園芸部の時代もあったのだが、別組織になって40年を経過すれば忘却の彼方となっている。新しい呼び名が定着するのは何年先であろうか。

### 2. 関係者の皆様「どうぞよろしく！」

職員の方々にも過去に同一組織であったことは意外と知られていないようである。かつての古巣であった組織の九州農業試験場との合流により組織された九州沖縄農研センターの一員として出戻ってきたことを内外の方々にここに改めてお知らせし、ご挨拶としたい。九州沖縄における野菜花き研究の中核機関として、従前と同様におつきあいをいただきたくお願いする次第である。

### 3. 久留米における野菜花き研究史の簡単な紹介

昭和22年8月に野菜花き研究部の前進である園試九州支場がここ久留米市御井町の地に設置されてから、55年間に経過した。この間、久留米は暖地九州沖縄（園試時代は関西以西、平成8年までは四国以西）の野菜花き（一時期は果樹、茶業）の試験研究の中心機関としての役割を一貫して担ってきた。長い歴史の中で、久留米が最も輝いた時は、昭和25年4月から36年12月までの九州農業試験場園芸部時代であったように思われる。食糧難の時代背景を受けて、試験研究による改善効果が最も大きいと期待され、これを柱として職員、農業技術研修生の全員が生き生きと活動した結果、最も優れた多くの研究成果が輩出した時代となったのではないだろうか。

市場から遠隔地にあるにもかかわらず、九州沖縄地域における野菜花き生産は、関東地域に継ぎ重要な地位にある。また、地域農業としても野菜花きは最重要の地位を占めているが、下記の4に例示するように久留米における試験研究の成果及びリーダーシップの発揮による間接的成果が大きく貢献している結果であると自他ともに確信している。

### 4. 二つの特大成果

1) 歯切れの良い食味を持ち耐低温性に優れ施設栽培適性の高いキュウリ品種の「久留米落合H型」

の育成は、元来、露地の夏秋野菜であったキュウリを施設栽培の冬春野菜に変えた。昭和30年代半ばから約15年にわたり全国を制覇した我が国で最高位を極めた品種であり、キュウリ関係者で「久留米落合H型」の品種名を知らぬ者は皆無であった。白イボ系に交代するまで不動の品種であり続けて、キュウリ生産の黄金期を築いた。



2) 芳醇な香りと砂糖とミルクが不要な甘みと多汁性を備えた豊産性の促成栽培用イチゴ品種「とよのか」の育成は、促成栽培の前進化と安定拡大に大きく貢献し、昭和58年の発表以来18年を経過する現在なお現役横綱を張っている。イチゴ年間粗生産額はリンゴとほぼ同額の2,000億円であるが、「とよのか」は約45%の900億円を売り上げており、今日までに累積1.5兆円近くの富を生産者にプレゼントした。

余談ではあるが、仮に売り上げの3%を研究費として予算配分されるとして試算すると450億円になる。部の年間総予算額は約3億円であるので、実に150年分の予算を「とよのか」だけで稼ぎ出したことになる。当たれば大きい研究の効果の1例であろうか。

### 5. 専門場所から地域センターへ

専門場所支場から地域研究部へと位置づけが変わった野菜研部では研究推進方向も地域対応に重点が移るが、本来専門場所の支場は専門・地域研究の二足の草鞋を履き、いわば一人二役を演じてきたのであるから、互いに簡単には切り離されない部分が多い。地域総合研究「亜熱帯」を支場時代も全研究室対応している等が典型例である。逆に、適地適産の分担によって周年供給を図ってきた野菜花き生産であるから、細部においては差異があっても基本部分では共通性がある。従って地域対応部分だけに専念しては地域対応自体が困難になってしまう関係にある。3年前の行監時に監察官側から研究課題の地域対応型と全国対応型との分類を要請された。二役を演じているのをお見通しであった。中期目標・計画の中でメリハリの利いた仕分けを行う必要を強く感じている。



## 研究成果 1

## 水稲直播栽培に用いる種子の保管と予措 —発芽・出芽を速やかにするために—

直播栽培における安定した出芽・苗立ちのためには、播種法や播種後の水管理が重要であるが、使用する種子自体の問題も少なくない。速やかな出芽と高い出芽率を得るためには、発芽能力に優れた種子を播種する必要がある。そこで、直播栽培において発芽と出芽を速やかにするための種子保管方法と酸素発生剤コーティングに先立つ種子予措方法について検討した。

### 直播栽培用種子の保管方法

収穫して脱穀・調製した後に、籾水分13~14%まで乾燥した種子と11%以下まで乾燥した種子を、それぞれ室内冷暗所（室温）と種子庫内（10℃）に密封保管し、翌年春の発芽特性をみた。

一般栽培に用いる日本品種の種子では、収穫翌年の播種期における発芽率はほぼ100%で、保管時籾水分の高低や保管温度の高低による差は小さかった。しかし、発芽速度については、室内冷暗所保管と種子庫保管とで大差ない品種もあるが、多くの品種では、室内冷暗所に保管した場合が低温種子庫に保管した場合に比べて発芽速度が速かった（図1（1））。

また、飼料用稲として用いることがある外国稲の種子の発芽率は、室内冷暗所に保管した場合が低温種子庫に保管した場合よりも高く、特に、高水分種子を低温種子庫に保管した場合の発芽能力は大きく劣った（図1（2））。

以上のように、収穫した翌年に使用する種子は、脱穀・調製後に十分乾燥させて、低温種子庫内ではなく室内冷暗所に密封保管した場合に最も優れた発

芽特性を示すことが明かとなった。なお、種子の保管期間が長期にわたる場合については今後検討する必要がある。

### 酸素発生剤コーティング前の種子予措法

酸素発生剤コーティングに先立つ低温浸種は、十分に吸水させて発芽を均一にするために重要である。また、休眠が深い種子（ヒノヒカリなど）では、浸種する前に乾熱処理（50℃程度で約1週間の通風乾燥）することによって発芽能力が向上することが従来から知られていた。しかし、休眠が浅いレイホウなどでは、低温浸種する前に乾熱処理すると、発芽速度は低下し最終発芽率も低く、明らかな発芽阻害が発生することが今回新たに明らかになった（図2）。なお、25℃条件で3日目の発芽率が約60%以上の種子でこの発芽阻害が発生するので、種子予措前に数日間の予備的な発芽試験を行うことで低温浸種前の乾熱処理の可否を判定することができる（図3）。

（水田作研究部栽培生理研究室長 楠田 幸）

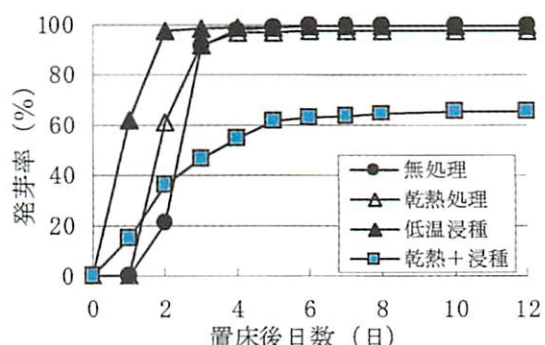


図2. 乾熱処理と低温浸種が発芽に及ぼす影響（レイホウ）

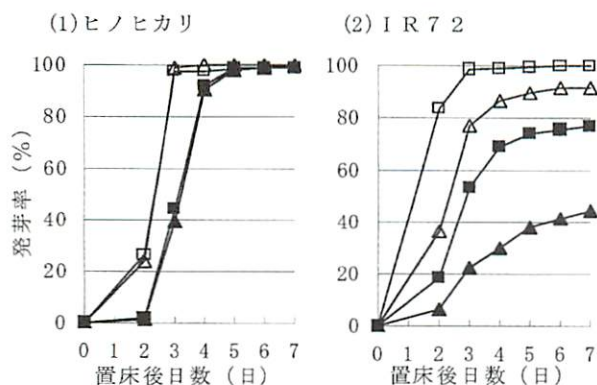


図1. 種子保管方法の違いが発芽率の推移に及ぼす影響  
□: 室内冷暗所保管・低水分種子 ■: 10℃種子庫保管・低水分種子  
△: 室内冷暗所保管・高水分種子 ▲: 10℃種子庫保管・高水分種子

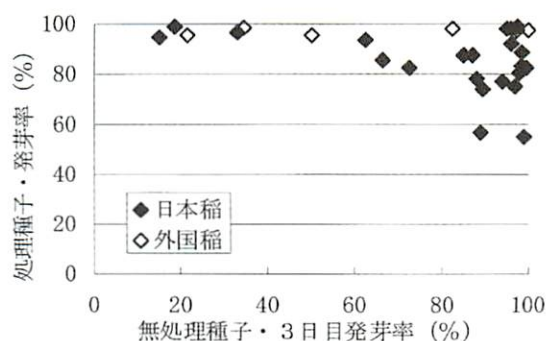


図3. 無処理種子の3日目の発芽率と処理種子の最終発芽率との関係

## 研究成果 2

オオムギ縞萎縮病抵抗性に関する量的形質  
遺伝子座近傍RFLPマーカー

はじめに

全てのオオムギ縞萎縮病ウイルス系統に対して抵抗性を示す中国在来「木港石3」由来の抵抗性は複数遺伝子が関与し、抵抗性は量的形質(QTL)として評価され、その内rym5はエステラーゼを分子マーカーとして育種選抜されてきました。その他の抵抗性遺伝子座の分子マーカーを開発すればオオムギ縞萎縮病ウイルス抵抗性遺伝子を迅速に集積できます。

## 量的形質遺伝子座(QTL)の解析

オオムギ縞萎縮病抵抗性を示す中国在来6条「木港石3」と罹病性ビール2条オオムギ品種「交A」を交配親とするF<sub>2</sub>集団120個体とF<sub>2</sub>系統1系統当たり

30のF<sub>3</sub>個体を用いてQTL解析すると縞萎縮病抵抗性に関する量的形質遺伝子座(QTL)はすでに形態遺伝子やアイソザイムマーカーでrym5およびrym1としてマップされていた染色体3HLおよび4H上のRFLPマーカーMWG85A-ABC172A間、あるいはMWG2134-WG464A間に位置づけられ、さらに7HS上に新たなQTLがJBG235-JBG209間に位置づけられました。これらQTLの近傍RFLPマーカーを用いて「木港石3」由来の抵抗性遺伝子を集積でき、育種現場での迅速な育種が期待できるでしょう。

(作物機能開発部育種工学研究室長

齋藤 彰)

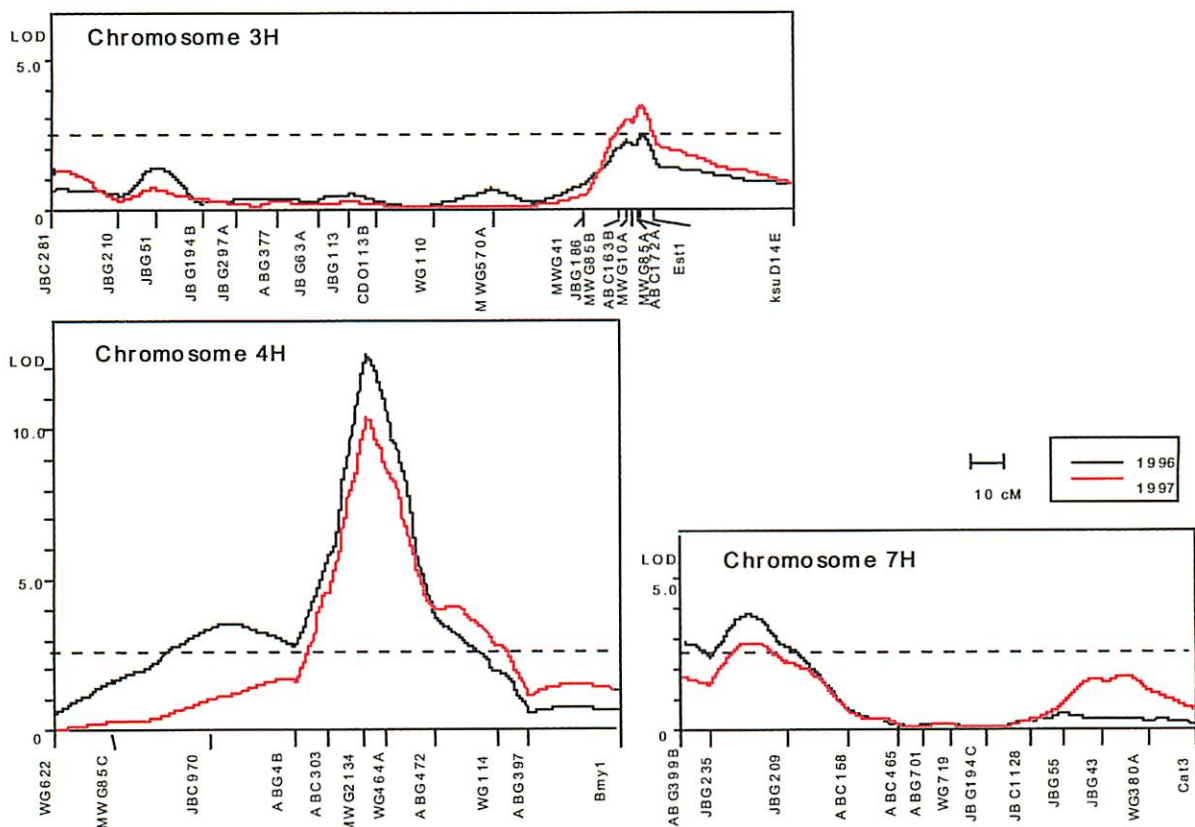


図1. オオムギ染色体3H, 4H, 7Hにおけるオオムギ縞萎縮病抵抗性QTLのLODファイル。LOD値2.5の点線はQTLの存在確認のために示した。RFLP地図の左が短腕とした。



## 九州沖縄農研の動き

琉球弧のさとうきび—地域ぐるみ歴史ぐるみの襁渡し—  
☆人事院総裁賞受賞記☆

種子島試験地 杉本 明

昨年12月5日、種子島試験地職員一同が第14回人事院総裁賞をさとうきび育種研究部門として受賞しました。私は代表者として、三輪理事長にお付添いいただき明治記念館での授与式に出席しました。午後には皇居で天皇・皇后両陛下に拝謁いたしました。両陛下からは、さとうきびや琉球弧の島々についての沢山のご質問と、ねぎらい、励ましを賜りました。お茶とお菓子をいただきながらの楽しいひと時でした。

なぜこのような立派な賞をいただいたのでしょうか、第1は研究成果が評価されたものと思います。琉球弧の主導品種NiF8を育成・普及し、早期・晩期収穫用品種Ni12、Ni14を育成しました。さとうきび産業の安定と発展に必要な収穫期間の拡張に向けた技術的基礎の確立や、新産業の創出に繋がる極多収化のための技術開発も認めていただいたようです。先輩諸氏の卓越した識見が礎になってもらされた成果だと考えています。

第2に地域の個人・団体、農業界・加工業界・学界等から成る育種ネットワークと、これに連なる多くの方々の一体となった協力が評価されたものと思います。種子島試験地には、農家、企業、農林行政、教育関係等、島の内外から多数の方が来訪され、多様な情報をもたらしてくれます。最近は本土各地の学校、個人との情報交換が多くなりました。地元での様々な会への私達の参加も多く、どれも貴重な情報交換の場になっています。

第3には、職場の活性の高さ、それを生み出している3職種一体となった日常業務の推進が認められたものと思います。種子島試験地では、2人の事務職員と3人の研究職員、6人の技術専門職員、そして非常勤の職員が一つのチームとして活動しています。この10年、それまでの仕事に、新たにエネルギー原料や飼料、食品原料用品種の育成が加わりました。近縁遺伝資源を用いた種属間交雑のための交配法開発やDNA解析等、新手法の導入も盛んに行っています。急速に増加した複雑な業務を正確に遂行するために、職員総掛かりで作業の省力化・システム化を工夫しており、最近ではかつて研究職員が行っていた業務を技術専門職員が行う局面が多くなりました。

た。研究成果の展示や機器の整備、会議開催等には事務職員が力を発揮します。3職種が互いの長所を研究推進に結びつけているわけです。職域受賞の所以と思っています。

今私達は、3つの目標を立てています。

第1は、南西諸島のさとうきび産業を世界水準に引き上げるための技術開発であり、その要となるのは、収穫期間の大幅拡張と株出し栽培の飛躍的な改善です。

2つ目は、琉球弧のさとうきびには台風、干ばつと瘦地圃場など不良環境への適応性が求められます。不良環境に強いさとうきびを作って砂糖やアルコールの原料とし、未利用部分の畜産利用を図って堆厩肥の還元・圃場への有機物蓄積を進めることは、痩せ地の改良に繋がります。地球的に見ると、半乾燥地域等における作物の安定多収栽培の実現は現在の重要課題です。琉球弧の産業振興を通して、島々のそして地球の環境改良に貢献するために、砂糖・アルコール原料や飼料用に向けた極多収さとうきびの開発を強化したいと思います。

3つ目は、琉球弧のさとうきびと消費者・市民とを近づけるための技術、すなわち、食品原料、飼料や景観形成用さとうきびの開発です。さとうきびは豊かな機能性を具えており、黒糖、酢や酒類が作られています。健康な家畜を飼養するための飼料としても期待されています。絞るかすは製紙原料や食物繊維にもなり、葉は染料や<sup>うわぐすり</sup>釉薬としても使われます。日本中の人々が琉球弧を想い描くような日常生活の繋がりを、さとうきびで作りたいのです。

海山が美しい琉球弧の島々で、さとうきびを通して地域と世界を護ること、そんな任務遂行の愉しさと緊張感の中でいただいた御支援が今回の受賞に繋がりました。本当にありがとうございました。





## イチゴ市販開始！

平成10年度から始まった地域総合研究「亜熱帯」では、この度、沖縄で生産されたイチゴが初めて県内のスーパーに出荷・販売された（写真）。消費者の反応は、本土産に比べて傷みが少なく、色つや、香りがとても良好で、美味しいと大変好評であった。研究では当初2年間は沖縄農試園芸支場内で個別技術の開発を行い、適応品種として「さちのか」、定植時期として11月1日前後が適することを明らかにした。これらの結果に基づき平成12年度から宜野座村の農家において実証試験を開始し、初年目は反収2.1tを上げ、まずまずの出足であった。問題点として、自然分化苗では年内での収穫開始が不可能であること、花芽分化が揃わず、出蕾、開花、収穫開始が株毎にばらつくこと等が上げられた。そこで平成13年度は短日夜冷装置を導入して確実に花芽を分化させるとともに、10月中旬に定植したところ、全株揃って12月中旬から収穫が始まった。また、頂果房の収穫開始が早まった分、第1次腋果房の収穫開始との間に1月半ほどの空白期間があったが、ハウ

## —地域総合研究成果—

スの半分に自然分化苗を11月1日に定植したところ年明けから収穫が始まり、この空白期間を補うことができた。2月23日現在、短日夜冷苗は第1次腋果房が収穫中で、第2, 3次腋果房が出蕾、開花中である。また、自然分化苗も第1次腋果房が収穫中で、第2次腋果房が出蕾、開花中である。この先連続した収穫が期待される。

（野菜花き研究部施設野菜栽培研究室長 荒木陽一）



スーパーでの販売が始まった沖縄産イチゴ

## 九州沖縄農業試験研究推進会議本会議の開催

### —重要研究問題「近年の需給動向に対応した農産物の新たな用途・付加価値の開発」—

平成13年度九州沖縄農業試験研究推進会議本会議が各県行政部局等を含む78名が出席して、平成14年2月1日（金）に九州沖縄農業研究センター大会議室（西合志）で開催された。

高木農業技術研究機構西南地域研究担当理事、柘植九州農政局次長の挨拶の後、上記の重要研究問題について、活発な論議が展開された。

#### 1. 先端技術を活用した農林水産研究高度化事業に関連する情勢について：

農林水産技術会議事務局細田地域研究課長から、次年度からスタートする本事業の仕組みが説明された。

#### 2. 話題提供：

最初に、「地域農作物の新たな用途・高付加価値化生産技術の課題と研究戦略」のテーマで、作物研究所羽鹿豆類育種研究室長より、新規性、付加価値情報、嗜好性、及び販売戦略等の観点から作目別に紹介された。

次に、「大豆の新たな用途・高付加価値化利用技術の

課題と研究戦略—大豆イソフラボンの機能とその応用—」のテーマでフジッコ株式会社戸田研究開発課長より、大豆の機能性を活かした製品開発について紹介された。大豆イソフラボンには骨粗しょう症等への予防効果があり、今後の新たな食品開発によって健康増進や長寿等への貢献が期待できることが詳述された。

#### 3. 九州・沖縄地域における研究推進方向について：

地域農作物の需要拡大に向け、ブランド化・オリジナル品種・地場産業との連携等をキーワードに、今後の技術開発のポイントについて、関係機関の考え方が紹介された。

#### 4. 総合討論（要旨）：

地域農産物の利用拡大に向けた産学官の連携研究の推進には、九州のイメージ作りがポイントである。とくに、研究者の努力に加えて民間や行政の力を結集していくことが重要で、戦略的に取り組む必要がある。

（企画調整部研究交流科長 池谷文夫）



## 海外見聞

## タイ東北部見聞記

畜産飼料作研究部環境生理研究室 岩間 裕子

平成13年10月16日から11月16日まで、タイ東北部にあるコンケン家畜栄養研究センターで、乳牛のCa代謝に関する研究を行う機会を得た。

## 雨季から乾季へ

コンケンはバンコクから飛行機で約1時間程のところある人工的に作られた都市である。中心部から30分程歩くと、郊外へ出てしまうくらいの大きさであった。コンケンの10月はちょうど雨季から乾季へと変わる時期に当たっており、次第に緑から茶色へと変わっていく景色を楽しむことが出来た。

## 食文化の様子

タイ東北部はラオスと接しているため、文化的にはラオスおよび、その上の中国の影響を受けているとのことであった。実際、言葉、顔立ち、食習慣などにおいて、バンコクや他の地域とは異なる点が多いように感じられた。食事に関しては、タイ東北部の料理はイサーン料理と呼ばれており、モチ米を多く食べる、激辛のものが多いなどの特徴がある。有名な料理はソムタム（青いパパイヤのサラダ）、ガイヤーン（鳥の丸焼き）、蒸したモチ米、お粥などである。料理の種類では、炒め物が一番多く、米で作った麺類、カレー、和え物、フライ類もよく見かけた。畜産物では、鶏肉、豚肉、卵がよく使われており、牛肉はあまり見かけなかった。乳製品に関しては、飲料品の棚の約半分がヨーグルト、乳飲料などで占められていたが、研究所や町中でそれらが飲まれているところはほとんど見かけなかった。乳製品は大抵、非常に甘く、日本ではあまり好まれない

味であると思われた。チーズ、バターなどはオーストラリアからの輸入品が多いようであった。主作物はコメとサトウキビ

コンケン周辺部の主要な作物はコメおよびサトウキビであるが、野菜栽培、畜産などが近年、伸びているそうである。しかし、同地域は水不足という問題を抱えているため、農業の飛躍的發展を望むことは難しいとのことであった。

## 乳牛の飼養管理

コンケンでは酪農家を訪問し、主に周産期の飼養管理状況の調査を行った。同地域の酪農家では、近くで手に入る稲ワラや米糠を多用するような飼養管理方法を探っていた。牛の状態、経営状況はかなり良いようであったが、更に乳量を増加させるためには、飼料の調製および給与法に工夫をすることが必要であると思われた。

現在、九州沖縄地域における乳牛の暑熱対策に関する研究を行っているところであるが、日本よりも更に暑熱負荷のかかっている乳牛を見ることが出来たことは、今後研究を進めていくために非常に勉強となった。



稲刈り



酪農家のカーフハッチ（手前）およびパドック（後方）



## 研修雑感

### 3か月の研修を終えて

福岡県畜産試験場 林 薫月

私は「成分調整等堆肥処理技術に関する研究」に従事するため、平成13年8月1日から10月31日まで3か月間、畜産飼料作研究部畜産総合研究チーム(以下「チーム」といいます)に受け入れていただきました。現場経験が乏しく研究歴も浅い私にとって、実規模での成分調整堆肥の生産および利用の実証試験などの実績が高いチームでの研修は、とても有意義なものでした。

最初の1か月は、資料の収集や試験に用いる成型堆肥の作成で過ぎましたが、暑い最中の作業はかなりきつく、体が持つのか少々不安に思ったものです。けれど、研修中は、試験設計等の指導は研究員の方々から受け、実際の準備から後片付けまでは業務科やパートの方たちに手伝っていただき、恵まれた環境(通勤時間がかからず、公私ともに雑用がない)の中で仕事に専念することができました。

ところで、私はよほど差し迫った状況にない限り、

週末は休んでいましたが、チームに限らず研究員の方たちは、時間にとらわれず、研究室にいて仕事をしていた…という印象を受けています。休日や夜遅くに電気が点いているのを見ると、いつ家に帰るのかと不思議に思いましたが、やはり、研究に取り組む姿勢の違いを感じました。

研修中は、チーム以外でも、堆肥利用についての考え方や分析手技、機械の操作等について、たくさんの方たちに教えていただきました。これからも、相談できる相手を得られたと、心強く思っています。

当場では、現在、水稻を中心に家畜排せつ物堆肥を用いたポット試験およびほ場試験を実施しております。「堆肥の利活用」という古くて新しい課題に、これからも取り組んでいきたいと思っております。



### 野菜花き研究部での研修を終えて

徳島県立農林水産総合技術センター農業研究所 松崎 正典

平成13年10月～12月の3ヶ月間、野菜花き研究部耐暑性野菜生産研究室において、依頼研究員として課題「‘さちのか’の促成栽培における低温暗黒処理による安定生産」に取り組みました。

‘さちのか’は着色・果実硬度・果形の揃いが優れ、食味が良く、ジベレリン処理や玉だし作業が不要で省力効果もあることから徳島県でも期待されている品種です。しかし、‘とよのか’に比べて、花芽分化時期が遅く、収穫開始時期が遅れる問題があります。そこで、‘とよのか’と同程度の年内収量を確保するために苗の低温暗黒処理による早期収量安定生産技術について検討しました。

その結果、‘さちのか’の低温暗黒処理苗定植における、本圃での培地冷却による生育促進効果はわずかで、頂果房の開花促進効果も見られませんでした。しかし、第一次腋果房では培地冷却により出蕾が促進される傾向が見られ、大変興味深い結果を得ることができました。

この研究課題への取り組みはもちろんですが、熊本県で開催された野菜現地研究会にも参加する機会を与えていただき、大変勉強になりました。その上、様々な懇親の場で野菜花き研究部、九州各地の試験場のみなさんとお互いの情報、考え方を語り合えたことも、大きな収穫でした。

野菜花き研究部では、研修生が多く、明るく、ユニークな方ばかりで、私的にも楽しく研修することができました。最後になりましたが、今回の研修の経験を今後の試験研究に生かし、徳島県農業の発展に寄与していきたいと考えています。

野菜花き研究部のみなさん、本当にありがとうございました。そして、今後どうぞよろしくお願い致します。





## 農林水産省からのお知らせ

## 安全な牛肉などの供給のために

## 牛海綿状脳症(BSE) Q &amp; A

平成13年9月、日本で初めて牛海綿状脳症(BSE)の牛が発見されました。  
 現在、国は、感染した牛の肉などが市場や店頭に出回らないシステムを確立し、牛肉などの安全性を確保しています。

**Q** 牛肉や牛乳・乳製品の安全性について教えてください。

**A** 英国におけるマウスなどでの接種試験の結果、牛の脳、せき髄、眼、回腸遠位部の危険部位以外から異常プリオンは発見されていません。OIE（国際獣疫事務局）の基準でも、牛肉はBSEの感染性のある危険部位ではなく、安全です。また、牛乳や乳製品についても、WHO（世界保健機関）専門家会議報告によると、乳はBSEを伝達しないことから、安全です。

**Q** 国はBSEに対して、どのような対策をとっているのですか。

**A** と畜場では、食肉処理を行うすべての牛について、厳格な検査を実施し、感染が認められた牛については、すべて焼却します。  
 また、OIEの基準で危険部位とされている脳、せき髄、眼、回腸遠位部は、BSEの感染の有無にかかわらず、すべての牛で、解体時に除去し、焼却しています。  
 農場においても、BSEが疑われる牛については徹底した検査を行い、これらの牛については、結果にかかわらず焼却することとしています。  
 この結果、BSEに感染した牛の肉などが市場や店頭に出回ることは一切ありません。

## 【牛海綿状脳症についての情報提供先】

厚生労働省医薬局食品保健部監視安全課  
 TEL 03-5253-1111(代) <http://www.mhlw.go.jp/>

農林水産省生産局畜産部衛生課  
 TEL 03-3502-8111(代) <http://www.maff.go.jp/>

**Q** 現在販売されている加工品は安全ですか。

**A** 国は、現在、流通している加工食品について、牛を由来とする原材料をすべて点検し、危険部位の使用や混入が認められた場合には、原材料の変更、当該製品の販売中止や回収を行うよう、製造業者・加工業者に対して指導を行っています。これらの結果は厚生労働省のホームページですべて公表されています。

**Q** 人間や他の動物に感染する心配はありませんか。

**A** 人間にもクロイツフェルト・ヤコブ病のように、脳が海綿状になる病気がありますが、そのうち変異型クロイツフェルト・ヤコブ病がBSEとの関連を指摘されています。  
 英国では1990年代半ばにBSEの牛が大量に確認され、1995年から2001年までに百余名の変異型クロイツフェルト・ヤコブ病の発症が確認されていますが、これは危険部位である脳などを食べていたことが原因ではないかとみられています。  
 なお、日本での変異型クロイツフェルト・ヤコブ病の発症例はありません。  
 また、豚や鶏といった家畜が感染したという事例は報告されていません。BSEに類似の病気として、羊のスクレイピーは古くから知られていますが、現在まで、人への感染の報告はありません。

**Q** BSEの感染源とされている牛の肉骨粉は、どのように取り扱われますか。

**A** 現在、国は、牛の肉骨粉について、すべての国からの輸入を停止しており、また家畜のえさとしての製造・出荷・使用を禁止しています。これによって、BSEの感染を確実に遮断する体制が整っています。



## 九州沖縄農業研究センターシンボルマークの決定

九州沖縄農業研究センターでは、独立行政法人として新たな出発を契機に、これまでの「九州農業試験場シンボルマーク」を基調に沖縄地域をイメージできるタイプを中心にシンボルマークを作成することになり、職員からの作品募集、職員による出品及び選考投票等を踏まえ、次の作品が「九州沖縄農業研究センターシンボルマーク」として決定しました。

このシンボルマークは、平成14年から当所の刊行物、ホームページ、レターヘッド、封筒、ポスターなどに広く使用します。

(企画調整部情報資料課)



## 人の動き

### 海外出張

氏名	所属	用務	期間	用務先
山川 理	畑作研究部長	サツマイモ国際シンポジウム	H13.11.23～ 13.12.1	ペルー
吉元 誠	畑作研究部 畑作物変換利用研究室	同上	H13.11.23～ 13.12.1	ペルー
田中 勝	畑作研究部 遺伝資源利用研究室	交付金プロ「形態・生理」の課題推進のための海外調査及び情報収集	H14.1.22～ 14.1.30	アメリカ
柴田 正貴	企画調整部長	東北タイププロジェクト事後評価会議 (JIRCAS)	H14.2.5～ 14.2.9	タイ
吉永 悟志	水田作研究部 水田作総合研究チーム	カンボディア個別派遣専門家派遣事業短期派遣専門家 (JICA)	H14.2.24～ 14.3.10	カンボディア
荒木 陽一	野菜花き研究部 施設野菜栽培研究室	林内栽培用野菜の育苗及び植え付け条件の解明 (JIRCAS 熱帯林アグロ)	H14.3.1～ 14.3.17	マレーシア
相原 貴之	総合研究部 動向解析研究室	フィリピン「高生産性稲作技術研究計画」に係る短期派遣専門家 (JICA)	H14.3.26～ 14.4.21	フィリピン

### 受け入れ研究員

氏名	種別	研究課題	受入研究室	期間
ASIS,JR,C.A	JSPSフェロースhip	南九州地域のサツマイモ・サトウキビに内生する窒素固定細菌の生態	畑作研究部 生産管理研究室	H14.2.19～ 15.2.18